

非水百花譜

第四輯

大正
9.8.17
内交

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



非水百花譜第四輯目次

やいとばな	(灸花)
やまゆり	(山百合)
むらさきつゆくさ	(紫露草)
ひがな	(彼岸花)
やまぶき	(山吹)

やいとばな (灸花)

學名 *Paeletia tonkinosa* Blume.
 異名 へくそかづら、さをとめかづら、さうばな
 漢名 女青、牛皮凍
 科名 茜草科 (Rubiaceae)

本邦各地の雑木林、藪蓋等に多く産する纏繞性宿根草本にして、六七尺に生育し、下部木質、葉を切斷すれば惡臭ある汁液を出す。葉は心臟形、銳尖頭を有し、長さ二寸餘、質柔かく裏面には少許の軟毛を生じ長き葉柄を具ふ。對生にして時に卵狀披針形或は披針形のものあり。夏期葉腋に花を聚繖花序に腋生す。萼合狀をなせる筒狀花は鐘狀の萼を有し、大さ凡三四分、先端は五個に分れ外部に反卷して絨毛を密生せる灰褐色を呈すれど、内部は紫紅色にして細長毛を有す。五雄蕊は花筒に著生して黄褐色の葯を有し、雌蕊は二個の長さ花柱を具へ、淡紅、末端は花外に突出せり。子房は球形にして二乃至無數の室を有し、肥厚せる隔膜を有す。心皮は各一個の胚珠を藏し、胚珠は又子房の基底に生じて直上し、珠孔は下向せり。花後、小豆大の漿果を結ぶ。表面平滑にして熟すれば美しき光澤ある帶褐黄色を呈し、其狀恰もオパール鑲の如く、學名なる *Andehita* も *Purpurea* 即ち *violacea* より來りしものにして此の果の樣を表はしたるものならむ。葉葉、果實共に惡臭を有し、有毒なりと稱へらる。本種の産地は頗る廣く、國內は勿論、支那、馬來半島、馬來群島、並に英領印度にも産すると云ふ。

備考
 一、前掲異名の項に記したる外
 かはやとさ、ひやうりかづら、さをとめばな、さうすまぐさ、やいとかづら、やとづる、をどりづる、くすかづら、ししまめ
 等の異名あり
 本圖 大正八年八月四日東京郊外に於て寫生(實大)
 附圖 (一)花の上面 (二)花の側面(以上對大圖) (三)葉の成長部(四)印葉(五)漿果(以上實大)
 (五)は一月五日寫生せるもの
 寫真 大正八年八月東京郊外に於て著者撮影





やまゆり (山百合)

學名 *Lilium auratum* Lindl.

異名 ほうらいじゆり(鳳来寺百合)、えいざんゆり(叡山百合)、よしのゆり、ためともゆり、すぢゆり、りやうりゆり、たもとゆり、たむのみねゆり(多武峰百合)

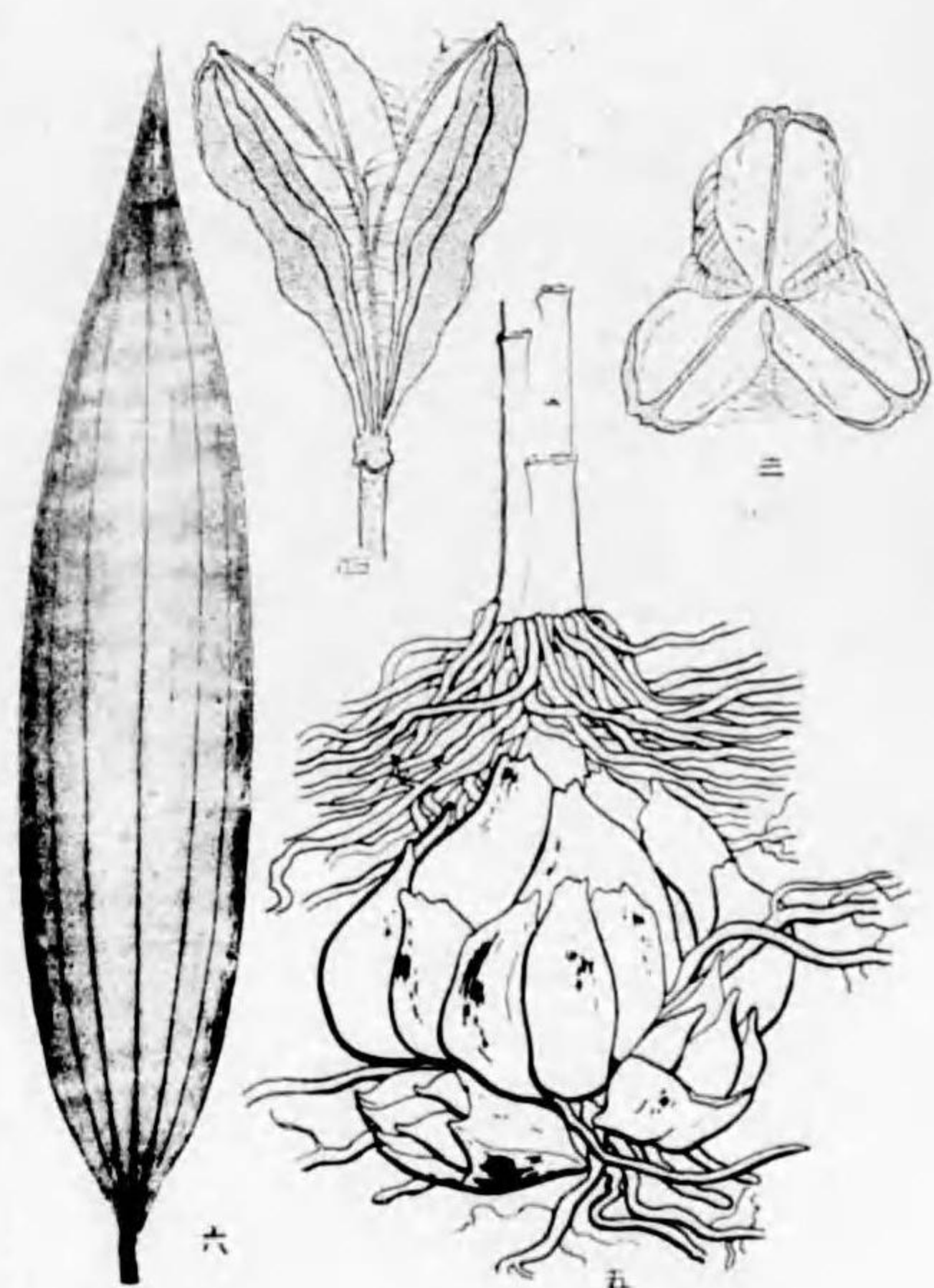
科名 百合科 (Liliaceae)

本州中部地方の山野に自生する宿根性草本にして、草丈凡そ三尺許り、遠州鳳来寺附近、叡山地方に多く産せしよりほうらいじゆり、えいざんゆりの名を生じたり。

葉は長楕形、先端尖り、互生す、花は大輪にして、夏期頃に近く数輪を着生し香氣濃郁なる愛すべし。地下に有する鱗莖は稍圓く、黄白色を呈し淡紫色を帯ぶるものあり。多數の鱗片は狭く先端尖り、食用として最も可なり。花は兩性にして三の數よりなる放射相稱、六個の花被を有し、花弁も花萼も共に略同形同大、弁花瓣状をなし稍反卷し、全く分離せり。色は白色にして各瓣の中肋は鮮黄色を呈し、紅褐色の斑點を散布し同色の刺毛を生ず。雄蕊一個、雄蕊六個、共に淡黄綠色を呈し、又紅褐色をなせる筋は二室にして内向し、其の背面の中央に於て花絲に着生す。子房は上位にして三室に分れ、中軸胎座をなし、胚珠は各室に二列す。果實は蒴果にして胞背裂開をなす。

本種に屬する園藝品種多けれど、其の主なるものを掲ぐれば次の如し

- Lilium auratum* 山百合 (日本原産(一八六二年)) 紅筋に似て之より幅廣く色濃し。
 - L. a. Ilmoroum* (Makino) サマユリ(爲朝百合) 白花に黄色の中筋、並に黄色の斑點を有するものにして花頗る大輪、香氣亦強し。
 - L. a. macrotubum* 花萼及葉の幅廣し(一八八〇年)
 - L. a. rubroradiatum* 紅筋百合と稱し花萼に深紅色の筋あり、*rubrum* と同云ふ。(一八六七年)
 - L. a. viridiale* 黄色の縞あれど斑點なし、白百合と云ふ(一八八〇年)
 - L. a. White* 前種と略同しく、初めて千八百六十七年に、*M. M.* 氏の紹介せるに依り此の名あり、俗に *White Lily* と稱するものにして本邦には其に白百合と云ふ。
 - L. a. latum* 日紅百合と稱し花萼の先端に紅色筋あり。
- 本圖 大正七年六月二十七日東京に於て寫生(實大)
- 附圖 (一) 蒴果 (二) 蒴果の横斷面 (三) 裂開せる蒴果の上面 四 裂開せる蒴果(五) 鱗莖及根、(六) 印葉(以上實大)(五)は花後八月十九日寫生せるもの。
- 寫真 大正八年六月東京に於て著者撮影



炎 花
 大正七年六月二十七日東京に於て寫生(實大)
 附圖 (一) 蒴果 (二) 蒴果の横斷面 (三) 裂開せる蒴果の上面 四 裂開せる蒴果(五) 鱗莖及根、(六) 印葉(以上實大)(五)は花後八月十九日寫生せるもの。
 寫真 大正八年六月東京に於て著者撮影





むらさきつゆくさ (紫露草)

學名 *Tradescantia virginica* L.

異名 あつまするせん(吾妻水仙)

英名 Flower of a Day

科名 鴨跖草科 (Commelinaceae)

千六百二十九年原産地北亞米利加に發見せる宿根草本にして、本邦には往年觀賞用として輸入せられしも、性強壯なるが爲今は至る處の庭園に繁殖し、初夏の花園を飾るべきもの、一とはなれり。葉は長さ線狀葉片にして全縁、其の基部は葉を包圍すること恰も麥類の葉に似たり。初夏の頃一二尺の花梗を出して梢上に數花を簇生す。花は紫色を帯びたる空色を呈し、全く分離せる三瓣より成る。雄蕊六個、其の花絲には多數の毛茸を有し、皆一列の細胞より成れるが故、植物學上、原形質の運動、細胞核の分裂、細胞質の循環運動等を觀察するに最も適當なる材料として貴ばれる。子房は三室より成り、各室には二個の胚珠を蔵し、胎座は廣し。果實は蒴果にして二又は三に裂開す。本種の變種に白花のもの、八重のもの及び紅色を帯びたるものありと云ふ。

備考

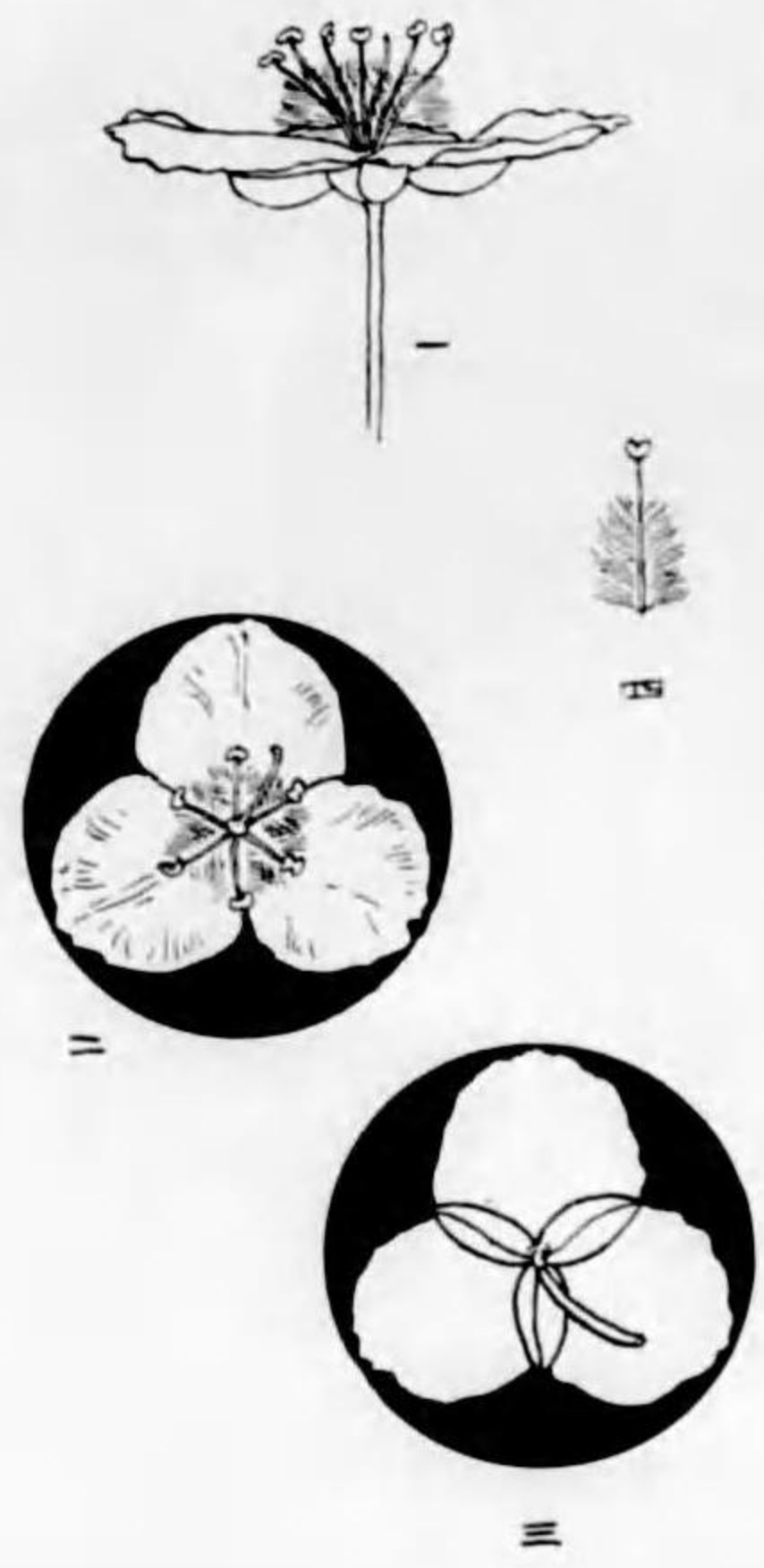
一、學名なる *Tradescantia* は「Charlottesville」に仕へたる園藝技師たる *John Tradescant* 氏の爲に名づけられたるものなり。

二、多くの顯花植物の細胞分裂は普通間接分裂に依りて行はるべきに本種にありては節間細胞中に於て直接分裂(端片分裂)行はれ、植物學上面白き現象として觀察せらる。

本圖 大正七年六月十四日東京に於て寫生(實大)

附圖 (一)花の側面 (二)花の正面 (三)花の背面 (四)雄蕊(以上實大)

寫眞 大正八年六月東京に於て著者撮影



山百合
 核 藤 井 水 書
 大 倉 平 兵 衛 卿
 西 村 熊 吉 撰
 存 陽 堂 發 行
 四 國 區 橋 本 日 市 京 東



ひがんばんな (彼岸花)

學名 *Lycoris radiata* Herb.

異名 まんじゆしやけ、したまがり、てんがいばな。

漢名 石蒜、烏蒜。

科名 石蒜科 (Amaryllidaceae)

アマモクマ属 (Valley) の植物にして、昔羅馬にありし婦人 Lycoris に依りて名づけられたる。

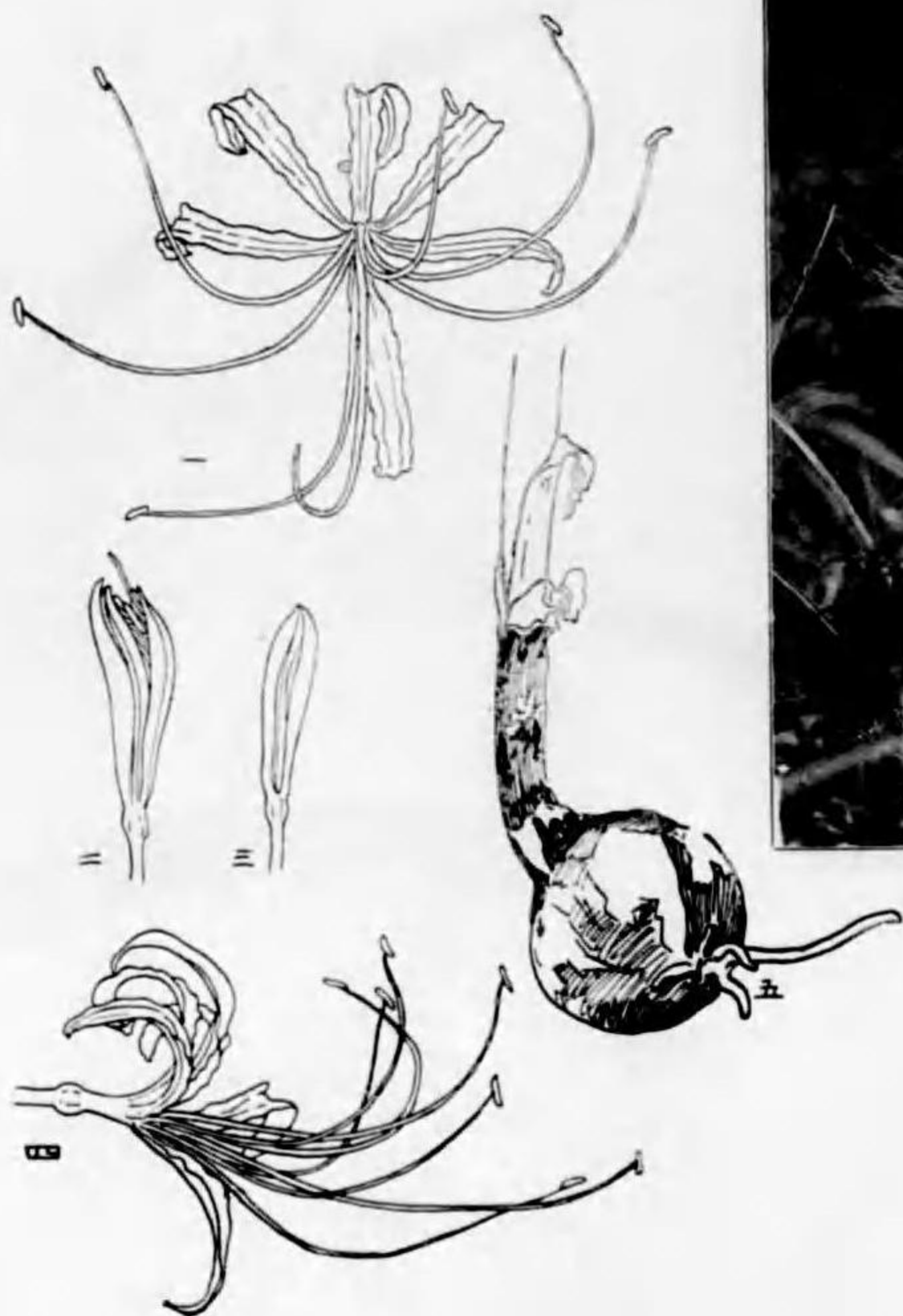
山麓路傍に生ずる多年生草本にして、地下には水仙に似たる球形の有皮鱗葉を有し、其の外皮黒色を呈す。此の中には有毒なるリコリン (Lycorin, $C_{12}H_{14}NO_2$) と稱する植物鹽基を含有し、其味苦辣、唯めば舌曲りて言語を發する能はざるに至る。若し誤りて口に入れば舌は硬直し、嘔吐、下痢を起し、終に神經中樞麻痺の結果死するに至るべし。

花期一尺程の無葉の根出花梗を出し、其の頂端に繖形をなして數個の花を開く。花は初め苞に依りて包まれる開花すれば美しい副花冠を有する紅色花となし、觀賞植物として充分の價値を存す。花筒は五分離せる六片より成り基部より生じて之に對生す。六雄蕊は紅色にして長く花外に超出し、花筒の基部より生じて之に對生す。葯は背面中央部に各分離せる花絲に附着し、丁字形をなし内向す。花柱は絲狀にして長く突出し、柱頭は小さく、三個に淺裂し、淡綠色の子房は短小にして上位、三室を有し、各室には二又は三個の胚珠をなす。中軸胎座にして胚珠は側生、規則正しく配列せらる。果實は胞背裂開となる。胚は小さく眞直にして且肉質の内胚乳にて包まれ中心より偏せり。未だ本邦にては自然に結實せるもの無しと云はる。

花去りて後、初冬の頃に及び初めて葉を生ず。葉は深綠色にして線形をなし、純度を有す。春期四月に至れば此の葉は枯死し休眠期に入る。近年觀賞植物として輸出せらる。事多し。

備考

- 一、前掲異名の外、此の花に對する稱呼頗る多し。其のまざるものを舉ぐれば、かみこりばな、からすのまくら、さんまいばな、とうろうばな、しびとばな、かみなりばな、はみづはなみづ、ちこくばな、へこび、てくさばな。
- 二、前掲漢名の外、此の花に用ひらるるもの次の如し。
老翁蒜、水麻、蒜頭草、使徒酸、一枝高、雙珠沙華、
- 三、地下の鱗葉は前述の如く鱗葉を有す。又藥用としての效力も多し。使徒酸、行痞、惡核、腫毒、惡核等に用ひらるると云ふ。又此の汁液を木箱に塗りてその害を防ぎ、壁土に混じて鼠害を防ぐと云ふ。
- 四、鱗葉を食用となす事あり。即ち之を乾燥又は水晒し、蒸して團子となし又生のものより澱粉を取りて食用となす。



圖本 大正八年九月廿八日安房太海
(大實)生寫て於に村
圖附 (一)花正正面(二) (三)花雷
(四)花側面(五)皮鱗葉
及根
寫真 大正八年九月安房太海村に於

紫露草

大正八年九月廿八日安房太海村に於て寫眞者影
西村 大倉 杉浦 水書
陽堂 發行 吉澤 兵衛 刺
春 陽堂 發行 吉澤 兵衛 刺



我

やまぶき (山吹、棣棠)

學名 *Kerria japonica* DC.

異名 面影草、かすみ草

灌名 御帶花、地棠花以上重瓣種

金盞喜小單瓣種

科名 薔薇科 (Rosaceae)

本邦にのみ原産するものにして、(Linn.)の植物園長たりし、L. Zucc. 氏の名譽の爲め此の學名を附けられたり。耐冬落葉灌木にして古來庭園に栽植せられ觀賞に供せられたれど、又山地に自生す。葉、美しい綠色を呈し高さ四五尺、根際より數本を叢生し、春期新葉の生じたる後黄色の花を開く。葉は長卵形にして尖り、鋸齒を有し互生す。花は一重と八重とありて單瓣のものは五個の萼片及花瓣を有し外榮を有せず。離瓣花にして雄蕊は無數、下部擴大し上部狭小となる。雌蕊は五個を具へ扁平なる花托の周圍には少數の心皮を輪生し、各心皮には一乃至二個の胚珠を藏す。閉果なり。重瓣のものは雄蕊の花輪様に變化したるものにして結實する事なく、古來特に八重山吹と稱し結實せざるものゝ表徴となれり。

備考

一、本種の學名は以前 *Coronaria japonica* と稱せられし事あり。

本圖 大正七年四月十六日東京に於て寫生(實大)

附圖 (一)(二)(三)花蕾の正面と側面(四)花の正面(五)(六)印葉(以上實大)

寫真 大正八年四月芝公園にて高瀬寫真館撮影



彼岸花
第 大倉生兵衛
杉浦非水書
春田口角松撰
行 徳島
四國國印本日本東京



終

吹 山

（第一卷）
杉浦非水書
大倉半兵衛刻
田口前松行
春陽發行

四國圖書社東京